

常設展示『春拳しゅんきよを知ろう』鑑賞案内

作家解説：山元春拳(やまもと しゅんきよ)

明治4年(1872)、滋賀県滋賀郡膳所町(現在の天津市中庄付近)で生まれました。祖父の高田善右衛門は勤勉な近江商人の鑑としてよく知られる人物です。小学校卒業後、遠縁にあたる京都の四条派の画家、野村文拳に入門。文拳が上京した後は文拳の師である森寛齋に師事しました。明治24年(1891)、竹内栖鳳らと日本青年絵画共進会を結成して日本画の近代化に努め、明治40年(1907)

には第1回文展の審査員となるなど、栖鳳と共に明治から昭和にかけての京都画壇を代表する存在となりました。また画塾早苗会を主宰し、門下生には川村曼舟、庄田鶴友、案本一洋らがいます。趣味の写真と登山を生かしたスケールの大きな風景画を得意とし、「春拳ブルー」と呼ばれる透明感のある水の表現にも定評がありました。昭和6年(1933)没。

展示作品解説

《半偈捨身図はんげしゃしん》

春拳の描いた人物画は少なく、そのほとんどが禅の素養に基づきます。とくに京都画壇へのデビュー作である《法塵一掃ほうじんいつそう》(当館蔵)や《出山釈迦しゅつざんしゃか図》(所在不明)は本作と同時期に描かれ、いずれも仏教がテーマです。本作の半偈捨身とは、ヒマラヤ山脈で修行していた雪山童子せつせん(釈迦の前世)が仏法の大綱のひとつ「諸行無常しよぎょうむじょう」の後半部(半偈)を鬼の羅刹から聞くのとひきかえに、自身を空腹の羅刹に与えようと飛び込んだところ、羅刹が帝釈天たいしゃくてんに変わったという説話。「半偈捨身図」もしくは「施身聞偈図せしんもんげ」は法隆寺の玉虫厨子たまむしのずしが有名です。落款は「明治二十八年春 春拳山元寛謹寫」。

《月夜海浜図》

眼前に見えるのは海から吹きつける風雨に耐えて根を張る松です。寄せる波は岩場に碎けて左へ

広がり、海原が穏やかな気持ちにさせてくれます。遠く浜辺の湾に船が停泊し、松の生える小高くなった岩山の背後から月が現れて、これらの情景は夜景とわかります。春拳が無地や金地に墨色のみで描いた同じく初期の作品を、当館は所蔵しています。本作は金箔が光を反射して全体に行き渡らせ、空間に奥行きを感じさせる優れた構図です。前所蔵者は五個荘町出身の近江商人で、郷里ゆかりの春拳へ依頼した作品と伝わります。

《初夏白糸の滝図》

1900年(明治33)パリ万博へ《富岳》を出品した春拳は、その後も富士山ほか日本の山岳や風光明媚な自然を題材に選びました。本作は、富士山の湧水が湾曲した絶壁より数百条になって流れ落ちる様が絹糸にたとえられる、白糸の滝を描いています。その背景には晴れたら見るとされる

富士山が聳そびえます。色彩はそれまでのセピア調に加え、木々の柔らかな緑色が鮮やかです。1913年（大正2）第7回文部省美術展覧会に出品した《春夏秋冬》以降、カラリストの本領を発揮してゆく春拳の萌芽がうかがえます。

《雪松図》

雪中の松は春拳が得意とした題材です。1908年（明治41）第2回文部省美術展覧会に出品した、複数の松を配する《雪松図》（東京国立近代美術館蔵）をピークとして、本作も同時期に制作したと推定されます。雪松図といえば円山応挙の《雪松図屏風》（三井記念美術館蔵）がよく知られていますが、雪を白色絵具の胡粉で塗るのではなく、余白で表現するのは本作も共通しています。けれども春拳は雪の質感や重量による枝のたわみ、雪からのぞく松葉の立体感を、鑑賞者の錯覚を利用して描いています。例えば、背景の金色による逆光の効果と、強い黒色の墨によって、白色がより明るく感じられ、ふんわりとした質感が雪に感じられるのです。

《近江八景図》

風景を得意とした春拳は、なぜか郷里の滋賀県をあまり描きませんでした。本作は、琵琶湖周辺の名所で構成する近江八景で、江戸時代に絵画化されてから描き継がれてきた題材です。春拳は四

季にそって名所を2つずつ描いています。春は「矢橋帰帆」と「粟津晴嵐」で、帆船が見えるのは桃が咲く矢橋、中景には粟津の松林。菜の花の岸辺に生えた芦原には船を浮かべ、漁をする老人がいます。夏は「唐崎夜雨」と「三井晩鐘」で、比叡山の麓に小さく唐崎の松、手前の三井寺も雨に降られています。秋は「石山秋月」と「勢田（瀬田）夕照」で、中景に描かれた石山寺の上に浮かぶ月が、瀬田の唐橋まで照らします。冬は「比良暮雪」と「堅田落雁」で、冠雪した比良山と浮御堂が描かれます。添景に人物を描いて臨場感を出し、また地理的に無理のない組み合わせにしたのは、さすが郷里の画家と言えるでしょう。

《大八嶋図（日の出図）》 おおやしま

大八島（八嶋）国とは日本列島のことで、イザナギとイザナミの二神が日本の島々を形成する過程を述べた『古事記』の国生み神話に出てきます。つがいの鳥はソウシチョウと思われ、雄と雌が互いに鳴き交わすことから「相思鳥」の名がついたとされる鳥です。本作は近江商人であった前所蔵者の結婚記念として、郷里ゆかりの春拳へ依頼されたと伝わります。大きな旭日も描かれて、まさに夫婦を寿ぐモチーフによる作品です。落款は「大正丙辰之年春三月 春拳畫」。

小倉遊亀コーナー 「物語を描く―挿絵の仕事―」 2003年6月25日（日）～8月20日（日）

小倉遊亀は、文豪谷崎潤一郎の小説『少将滋幹しげもとの母』『細雪ささめゆき』の挿絵を手がけています。挿絵は、小説の読者に対して、物語の世界を絵画化することにより、視覚的にも楽しんでもらうという大きな役割があります。その一方で絵画作品としても、物語の場面を次々に捉えたストーリー性豊かな一群は、ドラマティックで見応えが感じられます。本展示では、『少将滋幹の母』『細雪』の挿絵と、絵の中に「物語性」を感じさせる人物画3件を展示します。

《童女》

おかつぱ頭の少女がそら豆の皮を外しています。目を細め、はにかんだような表情が印象的です。背景は白く、具体的な風景は描かれていませんが、正座をしている少女の膝元と周囲の豆の位置関係から、描かれているはずのない床面が絵画空間のなかに想像できます。本作が描かれた1938（昭和13）年、遊亀は小倉鉄樹と結婚。翌年には教員と画家の二重生活を終え、以降画業に専念しました。第4回九阜会展出品作。

《春日》

洋装と和装の女性が向かい合って立ち話をしています。随分と会話が弾んでいるのでしょうか。楽しそうな大人たちを尻目に、赤い着物の女兒は右手に持った椿の花に夢中です。しかしよく見ると女兒の左手の人差し指は、母親と思われる後ろ姿の和装の女性の小指に引っ掛けられています。愛らしい仕草が微笑ましい、和やかな春の日の一場面です。本作は、東京の日本橋高島屋で開催された青丘会第4回展に出品されました。

《夏の客》

第29回院展に出品したのは二面一組で、本作はその右側（左側はウッドワン美術館所蔵）。夫の鉄樹居士の見舞いに訪れた客人に想を得て、客を迎えて対座する場面を描きました。本作の女性は煙草盆を脇に置いて丸髷に結び、粹に襟を抜いた藍色の浴衣姿、団扇を手に行っている年増です。左側に描かれている客は赤縞の着物に扇子を持ってパーマをかけた細身のモダンな女性であり、対照

的です。写実的な描写に主眼はなく、ちょっとした瞬間の動きを描こうとしたという画家の言葉どおり、人物の顔の形やポーズ、たつぷりとった余白に意図的な工夫が感じられます。人物はおおよそ三角形に収まるフォルムで形成され、その傾き加減で、二つの三角形が呼応し合っているように見えます。このことが二人の間のくつろいだ空間を演出しています。

《少将滋幹の母 挿絵・口絵・カット他》

1949（昭和24）年11月から翌年2月まで、毎日新聞に連載された谷崎潤一郎の小説『少将滋幹の母』。遊亀は本作の挿絵を担当しました。当館に収蔵されているのは、モノクロ刷りの新聞紙面に掲載された白描画（墨の線で描かれた絵）84面、初版本の口絵用に彩色で描かれた3面、そしてカット図版などを集めた2面の計89面です。平安時代が舞台の小説の挿絵制作にあたり、遊亀は古い時代の美術作品を学び、参考にしました。

《細雪 挿絵》

谷崎潤一郎の代表作でもある小説『細雪』の挿絵です。小説は1943（昭和18）年から1948（昭和23）年にかけて執筆されましたが、本挿絵は1970（昭和45）年に河出書房新社から刊行された単行本のためにカラーで描き下ろされました。遊亀が谷崎作品の挿絵を手がけるのは、1949（昭和24）年から翌年にかけて新聞連載された『少将滋幹の母』以来2作目です。戦前の大阪、船場の旧家の四姉妹を中心に繰り広げられる人間模様を描いています。